



歯学部  
教授  
越智 守生

## 「1978～2025年に感謝!!」

私は1978年東日本学園大学歯学部1期生として入学し、1984年に大学を卒業後坂口邦彦教授の歯科補綴学第II講座に助手として入局し、坂口教授と非常勤講師の三嶋顕先生にご指導を受けてインプラントの臨床と研究を行ってきました。1987年には三嶋先生と共にイェテボリ大学ブローネマルククリニックで研修を受け、1988年に本学大学院歯学研究科1期生として入学しました。私のインプラント治療はブレードインプラントから始まりましたが、口腔インプラントはブローネマルクとシュレーダーがチタン製ルートフォーム型インプラントを製品化した後、技術革新と研究の進歩により、今日の形となりました。また、診断技術では、CTの普及により顎骨の三次元的な形態計測や骨質の評価が可能になりました。また、3Dプリンターで製作されたサージカルガイドプレートにより、シミュレーションに基づいたインプラント治療が日常臨床で可能になりました。これら「DIGITAL Dentistry」の導入により、インプラント治療の検査、診断、治療精度が大幅に向上しました。

私の歯科医師としてのキャリアは40年を超え、インプラント治療の技術革新も続いています。最近のトレンドである「DX（デジタルトランスフォーメーション）」は、ICTの浸透により人々の生活をより良い方向に変革することを意味

しています。歯科分野でも、口腔内スキャナーや技工用スキャナー、リングマシンなどのCAD/CAM技術が成熟し、DX推進の突破口が見えてきました。

本学での活動を振り返ると、教授就任後は教務部や学生部の副部長を歴任し、その後学生部長として学生生活に寄り添った指導を行いました。1期生として学業や学外活動、部活動での経験が役立っていると考えています。また、総合図書館長という名誉ある職も拝命し、微力ながら本学の発展に貢献できました。教授の任期中、至らぬ点多々ありましたが、多くの教員、同窓・同門の先生方、学生、保護者の皆様の温かい支えにより任期を全うできたことに感謝しています。

北海道医療大学は2028年4月に、北海道北広島市のエスコンフィールド内に新キャンパスを増設する計画があります。本学設立から50周年を迎える2024年を契機に、新キャンパス増設の計画が前進し、大学は大きな変革を迎えることになります。これまで50年弱本学に携わった者としては、この大きな変革に立ち会えぬことは寂しい気持ちもございしますが、後進に未来を託しこれからのさらなる発展を祈念して、私の退任挨拶とさせていただきます。



歯学部  
教授  
三浦 宏子

## 「北海道医療大学での“12+5年間”を振り返って」

本学歯学部の2期生として1985年3月に卒業し、1985年4月に本学で研究教育職としてスタートを切りました。その後、国内外の教育・研究機関で経験を積み、2020年に再び母校に戻ることとなりました。研究教育職としての終盤を、再び母校で過ごすことの素晴らしさを深く感じております。最初の約12年間は、研究教育職の礎を形成する過程であり、大変多くの先生方にお世話になりました。そして、四半世紀の時を経て、本学に戻ってからは、これまでのキャリアで得た経験や知見を母校のために役立てたいとの思いで活動してきました。2020年に着任した時はコロナ禍の最中であり、大学での授業のあり方を再考する試練の時でもありました。助手・講師としての12年間に加えて、教授としての5年間は、私の人生において大きな意味を持つ時間でした。多くの方々を支えられながら、口腔保健学の発展に向けた研究教育活動を続けてこられたことを、心から感謝しております。

私の専門である口腔保健学は、歯科だけにとどまらず、地域での健康づくり対策の全体と大きな関わりを持ちます。そのため、地域住民の方々、自治体、歯科医療関係者、保健・福祉の専門職の皆さまと共に課題を共有し、エビデ

ンスに基づく歯・口腔の健康づくりに役立つ研究を推進することが求められます。本学での教育においても、歯科の専門性を活かしながら、地域に貢献できる力を養うことの重要性を、授業を通して伝えてきたつもりです。

超高齢社会を迎えたわが国において、地域での歯科保健医療対策は大きな岐路に立っています。地域で暮らす人々が、生涯にわたって健やかに過ごすためには、ニーズに見合った歯科保健対策を提供するシステムづくりが必要です。北海道という広大な地域において、歯科保健活動を展開する難しさと同時に、その可能性の大きさを実感する機会も多くありました。地域ごとの特性に応じた歯科保健医療の在り方、住民の皆さまとの信頼関係の築き方、行政や他職種との連携と共創の重要性など、学ぶことは尽きませんでした。

このような貴重な経験を積むことができたのも、本学の教職員の皆様、学生の皆さん、地域の方々との出会いがあったからこそです。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。そして、北海道医療大学がこれからも地域に根ざし、未来の歯科保健医療を担う人材を育成し続けることを心より願っております。



看護福祉学部  
教授  
竹生 礼子

## 「在宅看護と看護師の自律性・創造性を重視した教育に従事できたことに感謝」

定年を迎えるにあたり、これまでのキャリアと大学との出会い、そして看護に対する感謝の思いを伝えたいと思います。看護と大学に出会い、過ごしてきたプロセスを振り返りたいと思います。

私は、看護に対する知識も動機も薄く、資格をとりたい程度の曖昧な進路の選択で千葉大学に入学しました。クラスメイトとは意欲の面で格差がありましたが、なんとか1982年に大学を卒業し、病院の看護師として社会人をスタートさせました。入職当初は職務継続が心配されるほどの新卒看護師でしたが、患者さんが懸命に病と暮らしに向き合う姿から学び、自分の傲慢さを捨てることができました。病棟での研究活動を通じて、退院した患者さんを訪問し、生活の様子を捉えることで、自分たちのケアの効果と課題を振り返りました。この経験は、私の人生の基盤を築いた在宅看護と出会う重要なものとなりました。また、今の大学生を見つめる目と自分が苦しんだ看護学生・新人看護師時代が重なり、「看護を続けることで、看護が自分の人生を助けてくれるよ」とエールを続ける基礎的体験となりました。

1996年に家族と共に千葉県から札幌市に移住を決め、地域に根ざした生活と仕事を追求しました。転居後は、10年間にわたり緩和ケアと在宅看

護の実践を行い、訪問看護の経験を通じ、人々が住み慣れた住まいで自由に暮らしていくための看護の意義や責任について痛感しました。

2006年に縁あって本学の教員となり、看護学生を教える職をいただきました。益々人々の暮らしと健康を支える看護の魅力に心酔し、「地域で暮らす人々のQOL向上を探求する在宅看護」を懸命に学生に伝えました。本校は、とことん学生中心、対象者中心を貫いて教育していく大学であり、その理念に深く共感しながら教育にあたることが出来ました。学生の思考する力、看護師の自律性・創造性を重視していることを教員間で共有しました。また、大学の研究や社会貢献活動に参加することで、実践的な現場にも触れられる充実した毎日過ごすことができました。

これまでのキャリアを振り返ると、数々の出会いや経験が私を成長させてくれたことに感謝しています。今後は、これまでの知識や経験を次世代に伝えることを使命とし、新たな挑戦を続けていきたいと考えています。最後に、北海道医療大学がすばらしい後輩を育て続けること、保健医療福祉系の総合大学として益々の発展を続けることを祈念いたします。



リハビリテーション科学部  
教授

鎌田 樹寛

## 「北海道医療大学で定年を迎えられたことについて」

私は、1984年3月作業療法士養成校（北海道大学医療技術短期大学部）を卒業しました。国家試験の合格をへて、北海道立緑ヶ丘病院（十勝）に入職となり、臨床家として19年間歩んで来ました。様々な先輩や後輩（医療専門職）の方々と一緒に仕事させていただき、作業療法士としてのキャリアを積められたことは、時には辛いことや情けない経験もりましたが、今となってはよい思い出であり、とても幸せな気持ちになります。

養成教育の領域に進んだのは、小泉構造改革の下で少子・高齢化社会の到来を予測された、リハビリテーション専門職養成校の開設ラッシュがきっかけでありました。当時私は43歳にあり、正直これから学位を取ることに對する葛藤を抱えていたのを覚えています。元来好奇心が旺盛であったこともあり、“人生に後悔はしたくない”と考へ、思い切つて飛び込んでみました。専門学校（仙台）や公立大学（横須賀）の教員を務め、2012年より当大学リハビリテーション科学部設置準備室に迎えていただきました。準備室での具体的な業務は、現小島学部長（以下、学部長）はじめ、当時の先生達と教育理念・教育目標と三方針の作成、カリキュラム・シラバスの作成、非常勤講師依頼、臨床実習地契約確保のための訪問出張などであり、朝から晩まで日々の業務に追われてはいましたが、担当者

達は「なんとでも新学部を開設させる」という同じ心意気を持って臨んだ期間であったと思います。その晩秋の頃、第1期生を迎える入学試験（小論文）の採点を学部長と行い終えた帰り道は、“なんとも言えない充実感”に浸っていたことがとても懐かしい思い出です。

あれから現在では、理学・作業療法学科は12期生、言語聴覚療法学科10期生を擁する学生数が最も多い学部となっています。実に誇らしい限りです。今後私たちは、新たな感染症や地球温暖化環境にともなう天災などに対応して、生きていかなければなりません。折しもコロナウィルスのまん延がきっかけとなったデジタル技術の正しい活用や人工知能（AI）の活用は、すでに必須アイテムとなりました。大学の将来像を鑑みますと、今後より一層学生のための学部・学科を基盤にした、「社会に貢献できる教育や研究」が必要だと思います。大変微力ながら、もう少しお手伝いのできればと考へました。

最後に今年度定年を迎えるにあたり、関係者の皆様への感謝を申し上げ、大学の益々のご発展を祈念いたします。



医療技術学部  
教授

幸村 近

## 「臨床検査に導かれて」

定年を迎えるにあつて皆様へ感謝の気持ちを伝えたいと思います。私を北海道医療大学に導いたものは何かと言へば、それは臨床検査です。6学部9学科のうち最後にできた医療技術学部臨床検査学科の開設に携わる機会を与えていただいたことは、私の人生において全くの僥倖でした。ここに至る過程で関わってくれたすべての方々へお礼を申し上げます。

私は1984年に内科医師になりましたので、当然そのときから臨床検査との付き合いがありますが、密に関係を持つようになったのは1994年に旭川医大の検査部に行つてからでした。元々循環器内科医として若い頃はよく急性心筋梗塞の診療をしていました。それで血栓症に強い興味を持ち、研究テーマとして選びました。1990年からのアメリカ留学では血栓溶解薬および併用する抗凝固薬・抗血小板薬の実験的研究に従事しました。帰国後、出身医局に戻つて研究の継続を模索していたところ、血小板の膜タンパク質を調べていた臨床検査医学講座に行くよう言われたのです。時間はかかりましたが1999年に臨床検査専門医の資格を取り、次いで血小板機能検査の結果をまとめて医学博士の学位を得ました。

その後紆余曲折はありましたが、内科医として勤めた病院の全てで臨床検査部門との関わりが続き、界限に留まっていた。そうして2016年になり、お誘いを受けた仕事が北海道医療大学に臨床検査学科を新設するので教員にならないかというものでした。実はあまり迷わず決めました。父が教師であったので教職に就くのは自然なことでしたし、新設大学を卒業して新規の立ち上げの仕事の経験があつた私は、何か運命的なものを感じたのです。ただ誘つてくれた先生がいなくなつてしまい、自分が学部長に指名されたのは全くの想定外でした。

2018年に設置準備室に赴任しました。認可が一旦保留になり、11月にずれ込んだときは焦りましたが、何とか入試を終えて2019年に開設に至りました。その後のコロナ禍などを乗り越え、2023年に初の卒業生を送り出すことができたときは胸をなでおろしました。続いて大学院開設も行き、この春修士が誕生します。博士課程のスタートも控えています。そのため特任教授として大学に留まりますが、一区切りとしてご挨拶させていただきました。これまで我々の学科を選んで来てくれた学生達、ともに働いた教職員の方々、私をここに連れてきてくれた人々と運命の縁に感謝します。



薬学部  
教授  
飯塚 健治



歯学部  
助教  
尾立 光

以上の諸先生の他、  
薬学部 飯塚健治 教授、  
歯学部 尾立光 助教が定年を迎えられます。  
ありがとうございました。

With heartfelt thanks.

